

福生屠殺場とハム工場

川鍋幸三郎

一 はじめに

福生市の商工業を調べて誰でも気付くことは、人口も少なく、面積も狭い市に、なぜハム工場が二つもあるのか、ということであろう。

たぶん横田基地の米軍人の存在との関連を考えることであらうが、答えは否である。多少それとも関連はあるのであろうが、根本的には別の理由が存在する。それは、明治時代に開設された屠殺場との関連である。

本稿では、福生屠殺場の設立の背景、変遷及びハム工場設立の経緯などをまとめてみよう。

二 福生屠殺場

昭和35年10月発行の『福生町誌』によって、屠殺場の歴史

をたどってみる。

それによると、現在の加美町に田村太平氏によって私設屠殺場が開かれたのが始まりである。しかし、この屠殺場は屠殺場規則の改正によって設備などが不備だったため間もなく閉鎖されてしまった。

ところが、屠殺場の権利をあくまで町で保有すべきだという考えから、明治41年、田村半十郎、田村半左衛門、坂本半左衛門、村尾半助、村野和十郎、田村八郎、八巻善七、坂本金作氏の八名が出資し、合資会社福生屠殺場を福生七九四番地（停車場の東北）に設置し、田村一作氏が管理者として営業を開始した。当時は一郡一個所の屠殺場が許可される時代であった。

(一) 立地の背景

明治時代に、なぜ福生村に屠殺場が開設されたのかについては、資料もなく、関係者もいないので詳しいことを知ろうとしても困難である。

幸いにして、昭和14年合資会社福生屠殺場の経営を引き継ぎ、現在後述する市内でハム工場を経営している高橋三郎氏（福生七八九番地在住）からの聴取調査をもとに、若干の推察を加えながら背景を探ってみよう。

第一にあげべきは、明治27年11月19日開通した青梅線によって、東京との結びつきが強まり、福生村が西多摩地域の玄関口としての地域性を占めることになったために進取の気性が強まっていたのではないかとということである。一郡一個所という屠殺場の権利を福生が保有していることと、この意思にそのことが反映されていると考える。

第二は当時の畑作地帯の農家への養豚の普及が挙げられる。そして、この養豚の普及については、次のような当時の農業事情があったのである。

(1) 畑作地帯での生産力増大、現金収入増収のためには、堆肥の増産の必要に迫られていたこと。

そもそも武蔵野台地は火山灰地帯なため、地味はやせている。この地帯での現金収入源としては、養蚕、小麦などの換金作物栽培が重要な位置を占めているが、その増

産のためには肥料（堆肥）の増産が不可欠の条件であった。養豚の導入により、良質の堆肥が増産できたこと。

(2) 養豚の導入には、資金が必要であるが、乳牛や馬に較べ少額で済み、しかも飼育が簡単、短期間の飼育で出荷ができ換金することができる。現金収入を得るのに好適でもあること。

(3) さらに、家庭で毎日出る残飯等が活用でき、少数飼育ならば、購入飼料の割合が少なくても済むこと。などがあげられる。

(二) 創草期の屠殺場

開設後間もなくの屠殺場の状態を記した資料が福生市福生一七番地の田村家に保存されている。「屠畜台帳」と題されているが、これによって明治末年の屠殺場の概要を記してみよう。

つぎの表は明治44年10月の屠殺数である。

これによって、当時の屠殺場は四日に一度の開場でしかなかったこと、多い日でも屠殺数は10数頭にすぎなかったことがわかる。

この屠畜台帳には、入荷先（豚の出荷地）も記されているが、それを見ると、青梅町・五日市町・西多摩村（現在の羽村町）などの近在の町村からがほとんどであることもわかる。

2日	3頭
6日	6頭
10日	6頭
14日	6頭
18日	11頭
22日	9頭
26日	13頭
30日	8頭
計	62頭
内訳	牛 0頭 豚 62頭

つぎに大正元年9月の屠殺数をみると

2日	1頭
6日	1頭
10日	1頭
18日	3頭
22日	4頭
26日	4頭
30日	4頭
計	18頭
内訳	牛 0頭 豚 18頭

で月合計でも二十頭にも足りない。
さらに、大正11年12月のそれは

	豚	馬	牛	計
2日	23	1	0	24
6日	9	1	2	12
10日	21	0	1	22
14日	7	0	2	9
18日	23	1	1	25
22日	10	0	3	13
26日	25	1	3	29
28日	9	0	1	10
30日	24	2	1	27
計	151	6	14	171

屠畜台帳の記録はこの大正11年12月で終わっている。
しかし、前述の高橋氏の話では、このような状態が昭和10年代まで続いているようである。

そして、そこからわかることは、西多摩地方の養豚は、徐々にはあるが、農家に普及してきているということである。

(三) 成長期の屠殺場

昭和14年、この福生屠殺場は高橋三郎氏に経営が引き継がれる。この年は福生飛行場建設にむけて、土地が売却された年でもあった。

ところで、昭和10年ころに東京府下で営業していた屠殺場は、すべて私設のものであった。そのころ東京府下にあったのは五ヶ所で、三鷹・武蔵村山・狛江・八王子・福生であり、中でも福生の屠殺場は東京芝浦の屠殺場に次いで古い歴史を有するものであった。(高橋氏談)

氏は、当時、三鷹の屠殺場を経営していた父親の下で、書記の仕事をやっていた。その関係で福生屠殺場の経営内容をよく知っており、そのために経営を引き継ぐことになったのである。

この時、氏は、これまで四日に一度であった屠殺日を増やすことを考え、毎日屠殺ができるよう申請し、許可された。

この結果、氏の話によると、多い日で五十頭〜七十頭、少ない日でも三十頭の豚を屠殺するようになった。

そのころは、まだ自動車が普及していない時代であったから、豚や牛は「豚屋さん」と呼ばれる仲買人が農家から買い、リヤカーに乗せられて近在から運ばれてきたものである。

西多摩地域の「豚屋さん」は、瑞穂に一番多く分布し、瑞穂が西多摩随一の養豚地域を形成していたことをうかがわせる。

氏の記憶をもとに、当時の西多摩地域の「豚屋さん」の数を記してみるとつぎのようである。

生穂村	4軒
瑞穂	6軒
羽青	3軒
五日市	2軒
秋多	3軒
奥多摩	2軒

(すべて現市町名で標記)

現在の市町区域でまとめてあるので、はっきりした相違はわかりにくいのであるが、平場の畑作地域に多く分布し山場の地域には少ないのである。

この豚屋さんの分布の背後には、養豚農家があり、両者の関係は比例していたものと推察される。

ところで、この豚屋さんのリヤカーは、時代が経つにつれてオート三輪に変わる。また、出荷先の地域も、現在の埼玉県所沢市・東京都武蔵村山市・東大和市・八王子市域からというように拡大されてくる。そして敗戦を迎える。

(四) 敗戦後の屠殺場

敗戦を迎え、昭和20年9月福生飛行場は米軍横田基地として出発、福生町も市街化が急速に進むようになった。

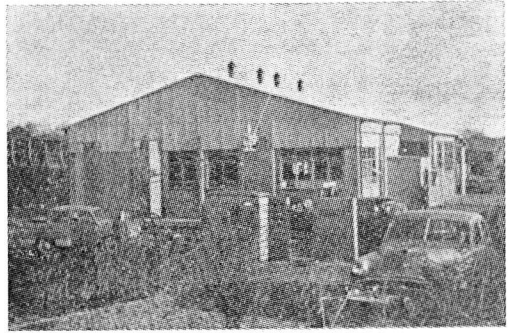
それに対し、福生屠殺場は施設の老朽化が進み、汚水処理や環境衛生面、食肉衛生上の見地から、公営屠殺場の建設方が要望され、町議会の決するところとなり、昭和31年公営屠殺場を福生三一二番地に着手することになった。

昭和32年10月29日開会された町議会定例会で福生町と畜場使用条例が制定された。

と殺解体料

- 一、牛馬一頭につき 四〇〇円
- 二、犢豚一頭につき 二二〇円
- 三、山羊めん羊一頭につき 五〇円

翌昭和33年1月15日号の福生町広報には次のような記事が掲載されている。



福生町営と場
昭和33年1月号「福生町広報」より

『福生町営と場完成』

『福生町には、以前から私営のと場があり、畜産の振興に大きな貢献をしてきたが、町の発展と共に附近に住家が密集し、環境衛生上憂慮されてきた。

たまたま関係業者から町営と場建設の陳情があり、諸種の事情を考慮して建設することになった。

そこで、昭和31年起債を得て第一期工事に着手し、続いて32年には八〇〇万円の起債が許可され、去る5月より第二期工事を進めてきたが、昭和32年12月11日落成をみたの

で16日より開業し、年末需要期に多大の成果を挙げている。この施設は一日に小動物一五〇頭、大動物五〇頭の処理を目的とし、月間五〇〇頭の処理能力を持っている。設備は近代化され、高架・軌条による自動機械操作や電殺機、電気鋸が整備され、流れ作業によりスムーズに処理されるよう設計されている。概要は次の通りである。

位置 福生町大字福生 3112			
敷地面積	1,200 坪	建物面積	173 坪
建設費	16,560 千円	と 事務室	96 坪
建築工事費	8,328 千円	管理入住宅	13 坪 5
用地費	1,813 千円	附属建物	12 坪 5
機械設備費	2,942 千円		51 坪
附帯工事費	2,477 千円		
諸 費	1,000 千円		

町営化されたあとの収支状況を表にして掲げてみた。』
これによると、昭和39年度以後42年度までは、爆発的に黒字

昭和34年度町営屠殺場使用状況

		屠 殺 頭 数							1	日
月	屠殺 数日	牛	馬	犢	豚	山羊	めん羊	計	平	均
4月	24	47	1	48	1,964	107	9	2,176		91
5	25	40	1	66	2,096	88	14	2,265		91
6	26	41	0	64	2,058	82	48	2,293		88
7	27	56	2	105	2,105	60	36	2,364		88
8	26	63	1	81	2,170	55	6	2,237		91
9	25	65	1	97	2,050	130	8	2,351		94
10	27	81	0	66	1,989	252	12	2,400		89
11	23	81	4	84	1,472	222	26	1,889		82
12	26	88	4	83	2,104	42	6	2,327		90
1	23	44	2	61	1,575	29	5	1,716		75
2	25	61	1	45	1,704	37	2	1,850		76
3	27	52	1	33	1,902	60	1	2,049		76
計	304	719	18	833	23,189	1,124	173	26,056		86
総屠殺数 に対する割合		% 2.76	% 0.07	% 3.20	% 89.00	% 4.31	% 0.66	% 100		
月平均		60	2	69	1,932	94	14	2,171		

昭和34年度屠殺場冷蔵庫使用状況

		八 庫 数							
月		牛	馬	犢	豚	山羊	めん羊	計	
7月		22	0	16	109	0	0	147	
8		64	0	8	260	0	0	332	
9		77	2	12	416	4	0	511	
10		83	0	17	187	12	0	299	
11		85	1	2	284	2	0	375	
12		138	12	14	493	0	0	657	
1		42	2	2	407	0	0	453	
2		65	0	4	580	2	2	653	
3		58	3	8	502	0	0	571	
計		635	20	83	3,238	20	2	3,998	
総入庫数 に対する割合		% 15.88	% 0.50	% 2.08	% 80.99	% 0.50	% 0.05	% 100	
月平均		71	2	9	360	2	0	444	

と畜場特別会計状況

年 度	歳 入	歳 出	差 引 額
S 32	12,941,000	12,903,000	38,000
33	10,901,000	10,626,000	275,000
34	10,504,000	10,382,000	122,000
35	7,938,006	7,696,576	241,430
36	9,023,220	8,327,173	596,047
37	14,325,137	14,074,728	250,409
38	16,450,069	16,200,628	249,441
39	18,325,206	18,157,296	167,910
			(一般会計へ 390 万円繰り出し)
40	25,094,033	20,430,694	4,663,339
41	43,593,924	36,297,394	7,296,530
42	32,493,386	24,180,379	8,313,007
43	30,401,527	29,028,333	1,373,194
44	32,088,000	31,831,000	257,000
45	—	—	1,580,000
46	32,146,000	33,681,000	535,000(—)

が増えている。これらの資料は、定期的に発刊されている広報の記事をまとめたものであるが、何故にこのような増収につながったのかは不明である。条例が改正されて増収が値上げされたものなのか、屠殺頭数の増加によるものなのか判然としないのである。しかし、この時は福生町が赤字団体に転落し再建法の準用を受けた時と一致している。そして、この町営と畜場も建設以来十四年経過し、昭和46年度には五三万五〇〇〇円の赤字となり、昭和47年3

月には廃止されてしまった。

昭和47年3月15日発行の市の広報（昭和45年7月1日に市制が施行された）に次のような記事が載っている。

「福生と畜場は三月で廃止」

『多摩河原にある福生と畜場は、三月いっぱいまで廃止することにになりました。』

昭和31年12月に開設以来、たいへん多くの方々にご利用いただきましたが、施設の老朽化をはじめ、最近の公害問題や財政運営の困難さなどから、廃止のやむなきにいたったものです。』

時あたかも、昭和31年に制定された首都圏整備法により市街地開発区域の指定を受けた福生市が、昭和37年1月加美平地区開発事業に着手し（完成は昭和54年3月）さらに福生市域に残された最後の未開発地域である多摩河原一帯の区画整理事業が昭和45年4月から開始され、一帯の水田地帯に都立福生高等学校（昭和46年4月）や市民体育館が建設され市への脱皮が図られた時代である。

三 福生のハム工場

平成2年1月現在、福生市内には二つのハム工場が操業している。

このハム工場の立地について、株式会社福生ハムを営んでいる高橋三郎氏からの聴取調査と株式会社大多摩ハム

小林商会発行の資料をもとにまとめみる。

福生にハム工場が立地したのは昭和22年6月のことであった。小林栄次氏が株式会社大多摩ハム小林商会を設立したのが最初である。氏は敗戦以前からドイツ人技師のローマイヤー氏の下で品川区内でハム製造に従事し、昭和7年6月には独立し工場を設立していた。ところが、その工場も空襲で全焼してしまった。

たまたま、戦争中、氏の工場が陸軍航空審査部の指定工場となり、軍へ製品を納入していたこともあって、横田の航空審査部を訪ね、相談した結果、福生に工場を設立することになったのである。

この時、工場用地の取得などに多くのアドバイスや仲介をしたのが屠殺場を経営していた高橋三郎氏だった。

高橋氏によると、当時のハム工場経営のポイントは原料である枝肉が容易に入手できること、しかも、実際に枝肉の状態を自分で見て購入することが大切だったそうで、そういう点から、屠殺場に近しいということが絶対に有利な条件だったのである。さらに、横田基地に近く、GHQの指定工場になり易いことも立地の一因であったようである。

ところで、福生へのハム工場の立地で一步小林氏に譲った高橋氏であるが、氏も同じことを考えており、一ヶ月後の昭和22年7月、ハム工場を設立した。これが現在の福生ハム工場であり、ほぼ同時に二工場がスタートしたのである。

前にも記したが、ハム工場の立地要因としては第一に屠殺場に近しいこと、それは、良質のハムは良質の枝肉を仕入れることが第一条件だからである。

高橋氏は以前にハム製造の経験こそ持たないものの、三鷹の屠殺場での書記時代に、狛江の屠殺場経営者がハム工場を設立するに当って相談を受けたくらい、ハム製造については関心を持ち、独学で研究をしていたのである。

そのような関係もあって、福生ハム工場を設立し開業するに際しては、前記の狛江のハム工場の職人が自ら退職し福生ハム工場に移ってきてくれ、助力してくれたことも大きな力となったのである。

四 まとめ

調査前はハム工場開設の経緯を主眼において着手したのであるが、調べて行くうちに、それは屠殺場が設立されたために付随して立地したものであることが判明した次第である。短期間に聴取調査や資料なども限られたものをもとにしてまとめたので、修正すべき点もあるかも知れない。福生市の近・現代の歩みを示す一事象でもあるので、ご批判や資料等をお持ちの方は是非ともご提供下さるようお願いしたい。

(かわなべ・こうざぶろう 市史現代担当編集専門委員
青梅市立第2中学校教頭)